

Title	石上良平著 英国社会思想史研究
Sub Title	
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1959
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.52, No.3 (1959. 3) ,p.268(74)- 273(79)
JaLC DOI	10.14991/001.19590301-0074
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19590301-0074

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

石上良平著

『英国社会思想史研究』

産業革命によって確立した若々しいイギリスの資本主義を代表する哲学は、ベンサムの功利主義であった。ダイシーは、十九世紀のイギリス思想史を立法の立場から三つに分類し、第一を *Period of Old Toryism*, 第二を *Period of Individualism*, 第三を *Period of Collectivism* としているが、個人主義の時代を支配し、十九世紀全般にわたって思想的に最も大きな影響を及ぼしたのはベンサムである。だがその思想は、全ての人に受け容れられたのではなくて逆に極めて党派的であった。河合榮治郎氏によれば、当時の思想界はおおよそ四つの種類に区別し得るのであって、「即ち一は最も右翼にある保守派なるトーリー党である。最も左翼に在るものが仏蘭西革命思想の宣伝者であって、共和制を主張し、共産主義を説き、無神論を説くものすらある。此の中間に二つあって、右党に近いものが即ちホイッグ党で、左党に近いものがベンサム一派の系統である。当時保守党の機関雑誌として *Quarterly Review* がある、カンニング、スコット等の主宰する所である。又ホイッグ党の雑誌には *ジュエッフレ* を中心とする *Edinburgh Review* がある。ベンサムの門弟は一方に於て最左翼なる仏蘭西革命思想を攻撃すると共に、

寧ろ主力を傾けて鋭鋒を向けたのはホイッグ党であって、彼等が不徹底不忠実なる改革派なることを攻めた。千八百二十四年彼の同志は集まって *Westminster Review* を発行し、ベンサム主義の宣伝を為し、忽ち世人の視聴を惹いたのである。其の後此の雑誌は廃刊になったが、千八百三十四年 *London Review* なる名を以て復活し、次で *London and Westminster Review* なる名称を採った。之に活動する人々を称して、*Philosophical Radicals* と云ったのである。」「(社会思想史研究) 昭和二四年、一三九頁」

実際には、トーリーとウィッグの性格はあまり違わず、共に土地貴族、一般地主階級にその基礎を置いているが、ウィッグは、次第に高まるブルジョアジーの議会制度改革の動きをとらえ、ロンドンの大商人達の支援を受けてやや資本家的だといえよう。ウィッグ党のグレイ内閣は、一八三二年以来三度にわたって *Reform Bill* (選挙法改正案) を議会に提出し、産業ブルジョアジーと労働階級の支持を得て、三二年六月ついにこれを成立させ、有権者は在来の三倍となった。この動きを実質的に推進したのもこそ、ベンサムを中心とする功利主義者達で、典型的な産業ブルジョアジーのイデオログとして、選挙法改正を通じて十九世紀に支配的な勢力を握るのである。

ところで、このような勢力の交替の動きについては、いくつかの重要な問題が考えられる。まず第一に、この変転は勿論産業革命の遂行による産業ブルジョアジーの経済社会における実質的な支配を

反映するのだが、それが政治権力の交替として現われる場合、どのような過程をとるか。たとえば、改正案が上院で否決された時には、人々は奮激して生産サボタージュを行い、ブルジョアジーは銀行取付を起して経済をまひさせることまで計画したと伝えられるが、どのような点で対立が激しく、またどのように妥協が行われたか。第二に、このような変動は、当然に社会思想に大きな影響を及ぼすが、それがどのような成果を生んだか。第三に、それが諸階級、特に労働階級に及ぼした影響如何。

この運動を担った哲学的急進派の人々をめぐっては、これまでまとまった研究が乏しかったが、石上良平氏が十九世紀の英国社会思想について独自の研究を発表されたことは、思想史の空白を満たすものとしてまことに喜ばしい。十九世紀の思想が多く新聞や評論に現われているので、氏がコブデン、マコーレー、ミル、グラッドストーンその他の人々の思想をこれらによってたんねんにまとめられた業績は貴重なものである。

* * *

この書で特に注目されるのは、ウィッグ派と功利主義的急進派の対立、つまり *T. B. Macaulay* 対功利主義者の論争である。マコーレーといえば、グレイ内閣が第二次選挙法改正案を提出して、上院に挑戦した時、「平和裡にでもまた混乱を通じてでも、合法的にでも非合法的にでも、議会を通じてでも議會を無視してでも、議会改革は実行されなければならない」と叫んだ熱心な改革論者として著

名であるので、この論争は同じ改革論者の立場の相違を知る上にもまことに興味深い。マコーレーは一八二九年の *The Edinburgh Review* に、*J. ミルの重要な論文 Essays on Government* に猛烈な批判を加え、それは *J. S. ミル* に深刻な影響を与えた。息子 *ミル* はすでに古い功利主義の信条に懐疑的となっていたが、これを機会に社会科学の方法論に対し新たな思索を加える事となった。だが石上氏は、この論争を社会科学方法論上の観点から見ると、マコーレーによって代表されるウィッグ派の思想と、*J. ミル* によって代表される功利主義的急進派の思想との対決としてこれを検討している。

一八二四年に刊行された *Westminster Review* は、「その読者は大方は豊かでない民衆的な階級の人々——この人々が書物を手に入れるのは主としていろいろのクラブ組織を介してである——であったから、読者の数が非常に多かった」(*A. Bain; James Mill*)。これは、トーリーもウィッグも、「差別はつけながらも、等しい熱心」まで攻撃したから、「貴族階級の二つの分派の間に少からぬ動揺を惹き起した」(*Bowling*)。この「ウェストミンスター評論」において、*J. ミル* はウィッグの「エディンバラ評論」を、次ぎのように批判する。この国の貴族には、在朝派 (*ministerial*) と在野派 (*opposition*) の二つの分派があり、「エディンバラ」は後者に追随している。政治理論は階級的傾向に基礎を置かねばならないので、これらの階級が階級的利害によって支配されていることは、否定さる

べきでない。在野派は権力に伴う特典を分配する手段を変更することを目的とし、「中等および下層階級」(the middling and lower classes)に働きかけるが、自分は貴族の一分派であり、指導的分派たろうとしているので、自己の特典を減少させるようなことを望む筈がない。そこで彼等の演説や文章には、一部は民衆の利益に、一部は貴族の利益になるようなことを言う「シーソー遊び」が見られる。彼らは貴族の権力を縮小する方法、たとえば秘密投票の採用の要求に対しては、それが悪い結果を伴うと称して猛烈に反対するが、貴族の権力を縮小するように見えて実はむしろその反対の効果を挙げるような提案——たとえば腐敗選挙区の廃止、州に対する議席の割当の如き——に対しては、口を極めて賞讃する。いわゆる「階級選挙制」のようなものは、彼らがこのような態度から発明したものである、と。(本書一四一―一四六頁参照)

ミルのこの批判は、トリー、ウィッグ両党の本質を衝いてあますところがない。ウィッグの三〇年のグレイ内閣は、四人を除いては土地貴族出身の閣僚でしめられ、その四人も土地貴族と親族関係にあったこと、その手で行われた改正議席の再分配についても、改正後も地主の支持をうける議員が下院で依然過半数を占めるよう巧みに工夫されていたことを思い合わせると、ミルの批判はまことに的を射抜いたものであり、ウィッグ攻撃の意気込みを示すものである。

このような対立の中であって、マコーレーのミル「政府論」批判

ion of others)、「名声」という強い精神的な欲望が在ることを強調している。

彼によれば、あらゆる人がどんな物質的快樂よりも、隣人の適度の称讃を尊いとすれば政府は不要であるし、逆であればミルが正しい。ところが実際には、人々は両方の快樂を持っている。「今もしも二つの階級の人々から成る一つの共同体があるとすると、一方の階級は主として一種の衝動によって左右され、他の一方の階級はもう一種の衝動によって左右されるとするならば、掠奪を熱望して評判には無関心な階級を抑制するために、明らかに政府が必要となる。だが政府の権力は、主として称讃を求める心によって動かされる階級に委任しておいて安全であるであろう。」ところで、次のことはかなりの妥当性を以て主張され得るかも知れない。——即ち、多くの国々においては、現に、或る程度まで右の如き叙述に合致するような二つの階級が存在するのであって、貧しい人々は、政府がこれを抑制するために設立される階級を構成し、そして若干の財産を有する人々は、政府の権力が危険を伴わずに任せられるような階級を構成している。激しい労働によってやっとな生活の資を稼げる人は、多くの贅沢を享受する人よりは、他人を掠奪したいという強い誘惑を感じる、と言ってよいかもしれない。群集の中に紛れている人は、地位と生活様式のために人目に立つ人よりも、自己の眼前にある世論を恐れることが少ない、と言ってよいかもしれない。(一四一頁)

石上氏によれば、「彼の社会観もミルと同様に、云わば『階級理

はどのようなものであったか。以下石上氏の書によると、マコーレーは、功利主義者は狭い理解と僅かな知識しか持たない平凡な人間であるという。高雅な文学に対して彼らが示す軽蔑は、明らかに無知によるものである。功利主義者が称讃する文体は、先験的に推理する (to reason a priori) ことが可能な諸科目にのみ適する。ミルの政府論は、「もし二三の偶然のほめかしが無かったならば、この著者が人間の間に実際に政府が存在したことを知っていなかったように思われる。人間の若干の傾向が想定され、これらの想定から政治学の全体が総合的に演繹されるのだ！ われわれはベイコンとガリレオの時代に書かれた本を読んでいるのではない、と思おうとしてもなかなか難かしい——これはまるで、医者が熱の性質から熱病の治療法を推理し、天文学者が天体に独立の運動はない、何となれば天体は不朽であり、自然は真実を嫌うからだ、と証明した時代の書物だ！」(一三五頁)

ミルは、「歴史の表面」ではなく、「内面の原因」を探究しようとし、人間性の法則から、絶対王制は長い目で見れば結局悪制となることを証明しようとした。だがマコーレーは、絶対王制がある場合に善政を生むという経験から、ミルの理論が誤りだと主張する。そしてミルが政府の目的を「財産の保存」であると言ったのを「人格と財産」とし、ミルが人間性の法則から貴族政体と絶対君主政体が人民を搾取し虐待する傾向があるとしたのであるに對し、彼は人間欲望の対象は物質的欲望だけではなく「他人からの好評」(the good opinion

論』的である。当時、社会的闘争がいかに時人にとって階級闘争として映じていたかが、これによっても明瞭である。ミルは「中等階級」によって指導されている限りに對し、「貧しい人々」に信頼を置いているし、「大財産所有者——つまり貴族を憎悪した」が、マコーレーは財産を持つすべての人々を擁護して、貧しい人々を信頼しないのである。「そして、このような階級観の違いこそは、両者の立場を分つ最も重要で最も顕著な指標であった。」(一四二頁)

歴史家たるマコーレーは、歴史の経験的事実については、理論家たるミルにまさる点もあった。また方法論的にも、「最大多数の最大幸福」という原理が、存在と当為の問題について混乱しているという功利主義批判は、当時のものとして出色のものである。だが全体として彼のいわんとするところは、ミルが等質な個人の集合を前提として民主制を主張したのに對し、不平等な階級の伝統を強調して特権的な政府の存在を擁護するものである。「上流および中等の階級 (the higher and middling orders) は人類の生まれながらの代表者である。彼らの利害は或ることに對しては彼らと同時代の貧者のそれと対立するとしても、後に続く無数の世代のそれとは一致するのである。」(一五一頁)

そこで選挙法についても、彼は功利主義者のように急進的な改革ではなく、穏健な改革に賛成する。「所得上の資格制限は、絶対に必要であると思う。そして、その金額を決定するにあたって、われわれの目差すところは、すべての見苦しからぬ農民と商店主とが選挙

権を持つことができるような風に、一線を劃すことである。特殊の形態の財産が他の形態に対して持つところの、また特殊の大きさの財産が他の同じ大きさの財産に対して持つところの、凡ゆる特典を廃止したいものである。そしてこれができれば、われわれは満足である。(一八〇頁) われわれはこのような論争の中に、権力の交替をめぐる争う二つの階級の要求と思想とを、あからさまに読みとることができるのである。

* * *

この書には更に、「J・S・ミルの懐疑——『聖アンドルーズ大学講演』に関連して——」「グラッドストーンにおけるキリスト教と自由主義」「十九世紀後半における自由主義の変貌——T・H・グリンの政治思想の研究のための序説として——」「社会民主主義と保守主義」の諸章があり、選挙法改正後現代に至るまでの政治思想のうつりゆきをまことに興味深く伝えてくれる。そしてこれらの叙述の奥に明滅するものは、「十九世紀イギリスの自由主義の本質を探ることによって、現代のいわゆる自由主義の本質を探りあてることが出来るであろう」(一七頁)という著者の一貫した意図である。

冒頭の章「自由主義の本質と構造——特にイギリスの十九世紀を中心として——」によると、ここでは「自由主義なるものの、真に中核的な内容」が問題であり、「これを知るためには、われわれは自由主義を最も完成され整理された形式において、しかも社会の進展に支配的な影響を与えるような生々潑刺たる形において把握しな

ければならない。」「そのためには、十九世紀前半のイギリスにおける自由主義を研究するのが最も適當である。」「氏はそこで、Benedetto Croce, Ramsay Muir, Bentham, Cobden, J. S. Mill などの自由主義にふれ、私有財産制とすべての個人的自由とを切り離せないという態度が、初期自由主義の基本的メンタリティを形成するのであり、二十世紀の新自由主義者にも根強く残っているから、「このことこそ自由主義と称される社会思想の中核にあるもの」(五四頁)と結論される。

問それでは、現代の自由主義の本質は何か？「社会の進展は自由主義者に対して、自由放任ではなくて、『社会改良』(social reform)を要求した……自由主義は初期にまともな外被を着けたままでは、かかる変貌を遂げることができなかったから、自らを抽象化し『心的態度』『一種の気風』に自らを変えざるを得なかった。」「ラムゼー・ミューアが「自由主義は、一定不変の思想体系であるよりは、むしろ一種の心の習性、一種の物の見方である。それは、凡ゆる生きた信条と同じように、一つの公式ではなくて、一つの精神である」と主張したように、二十世紀の自由主義は「一個の社会思想としてではなく、かかる心情的なものとして存続することとなった。」

それでは自由主義が、二十世紀に入って社会思想の地位から下りてこのような一種のモードに縮小した時、「私有財産とすべての個人的自由を切り離し得ない」という「自由主義と称される社会思想の中核」はどのようなようになったか？

この中核は勿論ブルジョア的のようである。そしてこの書にあるように、「社会の進展に支配的な影響を与えるような生々潑刺たる」自由主義は、選挙法改正運動に端的に見るごとく、何よりも階級的であり、改正論者の間でも階級的立場の違いにより論争を繰りひろげるほど激しい性格のものであった。そこで、「十九世紀の自由主義の本質を探ることによって、現代の自由主義の本質を探りあてるとすれば、現代のモードは、「中等階級の外被を脱ぎすてて抽象的なものになる」としても、やはりブルジョア的といえそうである。

ところが、自由主義の最も深いところには、「人間の内面的諸能力の発達、換言すれば人格の成長こそ普遍的な善だとする」個人主義が横たわっている(五五頁)。そしてこれは、イギリスの社会主義にも、「マルクス主義にも、多少の歪みはあろうとも」あるとするならば、問題は更に大きくならねばならない。これはブルジョア自由主義の変遷の範囲を越えて、その対立物の問題となるからである。選挙法の改正が労働者を裏切った時、大衆はチャーチズムに結集

し、労働運動と社会主義の宣伝が行われて、自由主義は激化した労資の対立を背景にして変転した。三三年の勝利の後にも、イギリスのブルジョアジーが政府のあらゆる要職を大い土地貴族に残したのはなぜかという謎を、エンゲルスはフランス語の教養から解いているが、これは勿論本質的には「ブルジョアジーの後継者がすでに扉を叩きつつある」が故の妥協であろう。ミルの思想には、その革新性と妥協性の両面が随所に現われて、それがまたマコーレーの攻撃するところであった。(たとえば一五二頁参照)

ブルジョアジーの政治面への登場をめぐって、私は先にその労働者階級に及ぼした影響の重要性を挙げたが、自由主義の根底は労働者階級に受けつがれ、労資の基本的な対立がブルジョア自由主義の動向に大きく影響しているのを考える時、石上教授のこの面の研究も期待せすにはいられない。(『英国社会思想史研究』創文社、八〇〇頁)

(白井 厚)